

ずん子

朝 露 生

この名簿をうつしとりて、遠き旅路にのぼらんと
 せるとき、妙な名をつけたものかなとひとりごと
 したのみで、御身のことにについてはその外少しも
 考へなかつた。しかし御身今は世になき人の數に
 入りしとき、二千余名の名簿のうち、御身の
 名が一番眼につくやうになつた。ア、假りに御
 身の師となりて、かくも愛念のうすかりしことの
 恥かしさよ。昔の下なるずん子よ。ゆるしてかく
 れ。四千里の海をへだて、居るが、植え置きし佛
 苗のおとづれ、船づくごとにかぬ折もなく、心
 はつねに教壇のはとりにさまよふて居る。今の夢
 を昔がたりにして、つどへる皆々に語らんと思ふ
 て居るものを、一人、そのさゝ手を失ふたこと、
 悔やしい。漁村の貧家に成長ちたる御身のことな
 れば、學齡の前より子守となり、わがもとにてイ
 ロハを習ひはじめたやうなもの、金釘流でもよい
 から手紙書けよと命じたにも拘らず、いつか來り

し一東のうちには御身の手紙はなかつた。習字で
 もよいのに、なぜ送つてくれなかつたか、恨みだ
 よまさか。この世で再び先生に遇はれぬとは御身
 も知らなかつたであらふ。

算術は極々きらひであつたネ。坪内さんの國語讀
 本、たしか六まですらすら讀めてあつたのに、加
 法と減法と漸くわかつた位で別れたネ。何日だつ
 たか、御身は先生に恨みを言ふたことがあつた。
 朝から晩まで子供を背負ふて苦しいのに、先生か
 ら算術でせめられる、これでは命がつかませぬ
 と云ふたネ。その時は大笑ひをしたが思へばまこ
 とにふびんだつた。
 せなかの子は、中々眠らない子で、面白い御話を
 きく時には、意地わるくも泣きだした、困つたこと
 もあつた。いつやらのお節句に、今日は一日子ど
 もを下してもよいとて喜びいさんであつたが、二
 時間ばかり遊ぶうちに、どうしてゐたか氣にかゝ
 つてたまらぬとて、家にかへり、またおんぶして
 きたことがある。あの子も今は大きくなつたらふ
 が、折々肝癪を起して、むしつてやつた黒髪の主

は、溝邊の御寺の墓に葬られて、松風の子守歌を
 さいて居るとは、知るや知らずや、子守學校の同
 窓は、この一年のうちに色々の變化の浪に襲はれ
 たやうだ。軽くなりし背中に、下婢のつとめと云
 ふ無形の重荷を負ふて居るのもある。お嫁さんと
 なりて、椿の花の葉がくれに、形ばかりの家庭をし
 つらひて居るのもある。ふる里離れて他郷のかゝ
 り人となりし子もある。早きはわが子を抱くべき
 年むろになりても、まだ子守をして居るものもあ
 る。されど死んだ御身こそは、誰れよりもかれよ
 りも一番貧乏だつた。いそがしき御身の父母は、
 富める人の悲しむほど、悶え煩ふひまもなかつた
 らふ。老ひたる祖父母さへ、涙片手に、働きに出
 たであらふ。富める人の葬式には、郷黨こそつて
 野邊送りするのに、御身の時にはさぞな淋しかつ
 たであらふ。墨染すがたの、御身の先生さへ、親
 しく御身の塚に花をたむけること出来ず、浮世は
 まことにこんなものか。吾とても片田舎の名なし
 草、いさゝ川に根を洗はれて、いッの間にか世の
 海に出て見れば、吾身の小なることが今更のやう

にはかなまれ、御身達が思ふやうな雄々しき心も
 うるはしき心も、いつの間にか波にもまれて失せ
 たやうなもの、大空に飛ぶ塵の一つよりも、たの
 もしからぬ身の上である。
 學びの道は云ふまでもなく、世渡りの術さへいつ
 も人後に落ちて、言葉も風俗も全く異なるこの國に
 見すばらしくその日その日を送つて居る。されど
 大慈悲の余光胸の底に宿りて、朝な夕な暖かき慰
 籍を得、夕な夕な新らしき激勵に奮起ちて居る。
 はかなしと思ひし浮世は、實に劫外の春たのであ
 つて、頼母しげなきこの塵の一つさへ、決して空
 しく飛んで居らぬ。名なし草の云ひかひなきも、
 無邊際の際の御親の掌に育てらるゝことを思ふては、
 何の恥らふことかある前も後も無碍光にうまれ
 て居るのだ。これはしたり、とんだむづかしいこ
 とを云ふたものかな。生きて居る御身なら、早速
 あべこべに御小言をあびせかけることであらふに
 今は世になきいとしの教へ子よ。ゆるせいもの
 先生の口癖ぞ。
 どうしても御身は死んだやうでない。イヤたしか

に御身は活きて居る。ついでの中に生れついでの中に息絶へしは、御身の肉身である。よしや綾羅の袂を纏へして、翠帳紅閨にやすらへばとて、この肉身のいつまでか、富み榮え、いつまでか變らぬ觀樂に醉ふを得べき。死なねば人のまごゝろのみなるぞ。ある時はワシントンのむくろに宿りて十三州の友のために泣き、身をさへげても友の自由を得せしめんとの貴き志を起さしめた。ロンダフエローに詩を書かせ、アーピングに痛告せしめたのも、まごゝろの大神の奇績に外ならぬ。東西古今の歴史縮くごとくに奇しき大威力の、錦を織り花を飾つて居るのに驚歎せぬことはない。事績の大と小と、人の知ると知らざるとは、論らふかぎりかは。偉人の而影にやどりし光明も、わがずん子の亂れ髪に寓せられし光明も、見來れば全く不二だぢやないか。

隣縣の人には少しも解せられぬ方言をまじへ、浦人のつねなる高調子にて、かたる御身の聲音は再びきかれぬであらふ。されど渡津海のさけびにも俗人の音樂にも、あはれとことは響ないことが

あらふか。あるときはバイブルをさへぐるミニスクーの口より、あるときは珠數を爪ぐる高僧の口より、御身の残れる音聲をさくこともあるであらふ、神の福音と名づくるもよし、佛智の不思議と讚するも可、人さまごまの名をつくりて、人さまごまの分限に従つて感得すれど、カント、ヘーゲルも辛ふじて獲得せる實を、掛け算も知らぬ子守にまで、惜しげもなく與へ玉ふは、ありがたき思召だではないか。神か佛か。吾知らず。吾は唯この大慈悲の光明普きことに感泣するものであり。

思ひ起せば、うれしきことの數々、そのまゝ悲しきことゝなるやうであるが、頼みがひなき吾身を師とたのみて、この幾年の間、親の如く兄の如くかしつける教へ子だちの心、どうして忘れやうとして忘れられやうか。傳道のかへりみち、ふりつもの雪に路もあらなくに、浪うつ際をしるべとして、わが艸庵に急ぐとき、村端の松林に、唱歌勇ましくうたひて、吾を迎へてくれたのは、御身等の一群である。吾妻河原に石を拾

ひて、夕日の浪間に沈みゆくを忘るゝ時も、わが聲をきゝては、集めし石をうちちて、背にせる稚子まで笑顔つくりてかけよるは御身等の常であつた。一年一度の盆躍り、明日からこの浴衣きてと新らしさをほこる時も、やめよ躍るなよとのわが一言にて、おとなしく服従して、思ひきりたるは御身等のエライところである。浪のしはぶさに裳ぬるゝ巖の上にまどゐりて、わが拙き話をさうとさきも、蕨とる野邊に蹲りてわが命ずるまゝ、暗誦を雲雀の如く囀る時も、曇りなき心月は形骸の外に輝きて、吾はひそかに御身等の従順の徳を敬ひたること幾度であつたらふ。教へしもの、學藝は言ふに足らず、習ひしものとして、ものゝ用には立ち得なかつたらふが、かの數年間に、吾等の間に咲きはこりたる友愛の花、御佛のさげものとして露恥かしきことはないと思ふ。

のこれる教へ子と御身の先生に、これよりのちいつまで學びつゝいくること出来るだらふか。いつまたかの松林に迎へらるゝことであらふか。御身の運命と同じくわが運命も前途は暗黒である。よし

やこの國にながくといまりて、金髪の教へ子、碧眼の友と修養を共にすることありとも、わが心には御身等のまごゝる常にやどり居るものを、吾はた何をか恨みとせん。くれどもくれども盡さぬくりごとを、書きて悲しみていつまでたつとも要なきこと、さらば、ずん子よ。異國の花は窓のもとにうちえめど、秋にも似たるわが心、御佛の外誰れにか語るべき、(八月十一日)

名士の家庭

太田 龍 東

戸水法學博士の家庭

予常に人に語るに、日露戦争に依りて天下に名を擧げたるもの三名あるを以てす。即ち一は東郷大將、二は小村男、而して他の一は戸水博士是れなり。前二者は戦争に大關係ある軍人及び外務大臣なれば、戦争の結果名を博するは敢て不思議なけれど、學者たる博士が之れが爲め全國至る所知らざる者なきに至りしは、蓋し英傑にあらずして何ぞ。而してこの一代の名士を出したる家庭が抑も如何なるものなるかを知るは、家庭の實際に當られる諸婦人には最も有益なることと思ふを以て、左に少しく之を説かんと欲す。